

## 次世代研究者の育成

金井 浩

現在、我国は、未曾有の借金を抱え、経済・社会が停滞し、先の見えない暗い状態にある。こうした状況を打破するため研究者にできることは、二つある。第一は、リスクは高いが成功すれば大きなブレークスルーをもたらす可能性の高い、困難な課題に自らが果敢に挑戦すること、第二は、将来のブレークスルーを託すことができる優れた研究者を育成することである。

前者は研究者自身のことであるから責務を果たすに尽きるが、後者のためには、若者に何を伝えることが必要なのだろうか。それは、まず研究者が自らの生き方をもって、困難に挑戦する「気概」と「努力を継続する能力」が研究者にとって最も大切であることを若者に示すことなのだと思う。

さらに、そのような研究者の「親父の背中」を若者に素直に受け入れて貰うためには、研究者が、「学問」と「生き方」両方に関し「誠実・謙虚」でなければならぬ。

そして、研究者は、心底から「研究が好き」でなければならぬ。井上達夫氏の「知は所有できるか」(科学 vol. 78, no. 9, p. 1)に次の一節がある。「研究者は仙人でもない以上、経済的利益に無関心ではないが、それは彼らの唯一の活動動機ではなく、通常は最も重要でもない。名誉心もあるが、それだけではなく、研究・表現活動自体に内在する喜び、自己の業績・作品が広く受容・利用され、学問芸術のさらなる発展に貢献するのを見る喜びもきわめて重要な動機付けとなる。」すなわち、研究者は心底研究が好きであって、人並みの生活が送れさえすれば私利私欲にはそれほど興味はなく、自ら出した成果が世の中に貢献できることが「研究の動機付け」になっていると言っている。このような研究者像は、昼夜なく+αの時間を見つけては努力する研究者へ

の救いの言葉のように感じる。

では、若者への「研究の動機付け」はどうすればよいか。若者を育成する研究助成金、奨学金、研究者の任期付きポスト、研究補助スタッフの充実など環境整備があるだろう。しかし、それらお金で解決することは本質的ではない。一方、最近、研究者の成果は、論文数に加えて引用数・特許・獲得研究費・製品開発の実績などの指標でも評価されるようになってきた。しかし、成果で最も評価されるべき要素は、解明した真理やその過程が「人を感動させられたか否か」であろう(勿論、定量的客観的評価は難しいから決して指標には採用はされないだろうが)。そして、深い「感動」を与えられるような「研究の素晴らしさ」を若者に示すことが、次世代の研究者に深い「動機付け」を与えるための最良の解だと思う。科学技術が発達して生活が便利になっても、自然現象や生体には人知の及ばぬことがまだ沢山ある。それはどのくらい沢山あるかも不明なほどである。その自然現象や生体の仕組みの素晴らしさを解き明かす真理の探究や計測・診断への応用も、自然現象や生体の仕組みを積極的に利用する治療やもの作りの研究も、次世代の研究者に研究への深い「動機付け」を与える。

すなわち、現在のわが国の閉塞感を破るために現役研究者にできることは、「努力の末の幸運」と「独自の秘術」を信じて日々試行錯誤を行う謙虚で地道な努力であり、その成果が、次世代を託す若者にも「深い感動」を与え彼らの育成にも結び付くのである。例え成果まで辿り着かなくても、その地道な努力の過程もまた、若者の育成に結び付く、と僅かでも期待できれば、研究者の日頃の努力も報われる。

深い感動を読者に与え得る優れた研究論文が、本学会誌に沢山掲載され、次代を担う優れた若者が一

How to cultivate young researchers

編集副委員長、東北大学大学院工学研究科電子工学専攻/医工学研究科医工学専攻

Hiroshi Kanai, Associate Editor, Graduate Schools of Engineering and Biomedical Engineering, Tohoku University, Miyagi, Japan

人でも多く巣立つことの一助になれば、編集者の一人としても大変幸いである。